慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦間期中国商工業貸付市場の変容 : 天津に於ける信用リスク管理の分析を中心に
Sub Title	The transformation of Chinese commerce-and-industry loan market during the interwar period : focused on the management of credit risk in Tianjin
Author	諸田, 博昭(Morota, Hiroaki)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2014
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.106, No.4 (2014. 1) ,p.549(133)- 574(158)
JaLC DOI	10.14991/001.20140101-0133
Abstract	20世紀前半の中国金融史に関する多くの先行研究では, 銀行の躍進が顕著となった1930年代を画期とし, この時期の銀行を高く評価している。本論文はこうした先行研究を踏まえて, 天津に拠点を置いていた有力銀行の金城銀行と, 上海に拠点を置いていた上海銀行の経営史料にまで分析を深め, 1930年代に於ける銀行の直接貸し付けによる貸付市場の再編は, 銀行と地域によって一様ではなかったことを実証した。 In various pioneering studies on the history of Chinese finance in the early 20th century, the 1930s, where the rapid progress of banks became prominent, are considered groundbreaking as the banks in this period were highly regarded. Based on these pioneering studies, this essay deepens the analysis with management annals from the Kinjo Bank, a leading bank based in Tianjin, and the Shanghai Bank based in Shanghai, demonstrating that the reorganization of the loan market through direct loans from banks in the 1930s was not uniform, depending on banks and regions.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20140101-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦間期中国商工業貸付市場の変容―天津に於ける信用リスク管理の分析を中心に―

The Transformation of Chinese Commerce-and-Industry Loan Market During the Interwar Period: Focused on the Management of Credit Risk in Tianjin

諸田 博昭(Hiroaki Morota)

20 世紀前半の中国金融史に関する多くの先行研究では，銀行の躍進が顕著となった 1930 年代を画期とし，この時期の銀行を高く評価している。本論文はこうした先行研究を踏まえて，天津に拠点を置いていた有力銀行の金城銀行と，上海に拠点を置いていた上海銀行の経営史料にまで分析を深め，1930 年代に於ける銀行の直接貸し付けによる貸付市場の再編は，銀行と地域によって一様ではなかったことを実証した。

Abstract

In various pioneering studies on the history of Chinese finance in the early 20th century, the 1930s, where the rapid progress of banks became prominent, are considered groundbreaking as the banks in this period were highly regarded. Based on these pioneering studies, this essay deepens the analysis with management annals from the Kinjo Bank, a leading bank based in Tianjin, and the Shanghai Bank based in Shanghai, demonstrating that the reorganization of the loan market through direct loans from banks in the 1930s was not uniform, depending on banks and regions.

「三田学会雑誌」106 巻 4 号（2014 年 1 月）

戦間期中国商工業貸付市場の変容

——天津に於ける信用リスク管理の分析を中心に——

諸　田　博　昭

（初稿受付 2013 年 7 月 4 日，
査読を経て掲載決定 2013 年 12 月 25 日）

要　　旨

20 世紀前半の中国金融史に関する多くの先行研究では，銀行の躍進が顕著となった 1930 年代を画期とし，この時期の銀行を高く評価している。本論文はこうした先行研究を踏まえて，天津に拠点を置いていた有力銀行の金城銀行と，上海に拠点を置いていた上海銀行の経営史料にまで分析を深め，1930 年代に於ける銀行の直接貸し付けによる貸付市場の再編は，銀行と地域によって一様ではなかったことを実証した。

キーワード

銀号，銀行，信用リスク管理，中小商工業者，1930 年代の恐慌

はじめに

第一次世界大戦開戦以降，中国において，有限責任制を敷く中国系資本の銀行が盛んに設立されるようになった。それらは，一般的には在来の小銀行である銭荘，銀号よりも資本規模が大きく，新式銀行，あるいは単に銀行と呼ばれた。第一次世界大戦時には，外資系企業が中国において弱体化したこと等により，中国系商工業が興隆期を迎え，これに応じるように銀行の設立ブームが起こった。銀行はその後日中戦争に至るまで拡張を続け，1930 年代に入る頃には，銀行界全体の預金貸付規模は銭荘，銀号のそれを遥かに凌ぎ，国内金融市場において最も大きな預金貸付規模を持つ金融機関となっていた。

戦間期の中国の銀行については，同時代から現在に至るまで非常に厚い研究の蓄積がある。同時代の研究は，この時期の銀行について，産業界との関係の希薄さ，政府との関係の深さ，公債，土地投資あるいは投機などを特徴とする半封建的金融機関であり，近代化への貢献は少なかったとする説が大半であった[(1)]。しかし，1980 年代以降は，農業貸付，工業貸付の研究を中心として，この時期の銀行は近代化に役立ったとする実証研究が蓄積されてきており，今日では銀行のこうした評価

は一般的なものとなっている。[2]

更に，近年に於いては中国の研究を中心に，個別の銀行の実証分析も進んできている。これらの研究は，総括して戦間期の銀行の中でも特に有力であったものを取り上げ，銀行は産業等の近代化に役立っただけではなく，銀行それ自体が組織や人事，経営などにおいて優れた管理体制を敷いていたことを実証したものであり，1980 年代以降の研究動向を踏まえ，それを更に進展させたものであると言える。[3]

しかし，これら 1980 年代以降の研究は，銀行の経営の近代化は金融機関全体の動向からどのように影響を受け，或いは与えて進展していったのかという，銀行を含めた金融機関全体への視点を欠いているという問題がある。[4]

1930 年代の恐慌期においては，多数の銭荘，銀号の貸付が停滞或いは減少し，銀行がそれらの業務の一部を代替するようになっており，銀行の経営拡大は金融機関全体の勢力図を大きく変えることとなった。貸付市場においては，市場の中で銀行貸付の比重が高まっていく中，銀行自体も自身の改革を進めていったことで，金融界全体の貸付の在り方も大きく変わっていった。本論文では，そうした一連の現象を貸付市場の再編と捉え，この問題を金融機関と顧客の取引を中心に，金融機関の同業貸付についても若干触れつつ考察する。1930 年代の商工業貸付に於ける銭荘，銀号の衰退，銀行の躍進という現象については，岡崎清宜と李一翔の研究などがあるものの，[5] 1930 年代の貸付市場の再編過程における，個々の銀行の特徴が持った意味については等閑視されたままである。

1920 年代の中国では，上海及び北京（国民政府期は北平と呼ばれたが，本論文では北京で統一する），

---

(1)　呉承禧著，玉木英夫訳『支那銀行論』東京叢書閣版，1937 年や，楊蔭溥『楊著中国金融論』上海黎明書局版，1931 年，楊蔭溥『中国金融研究』商務印書館，1936 年などが代表的な研究である。他に香川俊一郎『銭荘資本論』実業之日本社，1948 年などがある。

(2)　農業貸付については，中田昭一「南京国民政府期の河北省における綿作改良と金城銀行」『史学研究』第 207 号，1995 年 10 月や，飯塚靖『中国国民政府と農村社会——農業金融・合作社政策の展開』汲古書院，2005 年等がある。ただ，飯塚はこの時期の農業貸付について，様々な局面における限界も指摘している。商工業貸付については，李一翔『近代中国銀行与企業的関係（1897～1945）』東大図書公司，1997 年や富沢芳亜「銀行団接管期の大生第一防織公司——近代銀行における金融資本の防織企業代理経営をめぐって」『史学研究』第 204 号，1993 年 12 月などが代表的な研究である。

(3)　上海商業儲蓄銀行については，曽憲明「上海商業儲畜銀行にみる中国銀行業の形成過程（1920–1931）：上海における貸付業務の分析を中心に」『社会経済史学』第 67 巻第 5 号，2002 年 1 月や薛念文『上海商業儲蓄銀行研究（1915–1937）』中国文史出版社，2005 年など。金城銀行については，劉永祥『金城銀行：中国近代民営銀行的個案研究』広東商学院学術文庫，2006 年，及び諸静『金城銀行的放款与投資（1917–1937）』復旦大学出版社，2008 年が代表的であり，中国銀行については董昕『中国銀行上海分行研究：1912–1937』上海人民出版社，2009 年がある。

(4)　杜恂誠主編，杜恂誠，賀水金，李桂花著『上海金融的制度，功能与変遷：1897–1997』上海人民出版社，2002 年及び孫建華『近代中国金融発展与制度変遷』中国財政経済出版会，2008 年などでは，金融市場全体の制度の変遷において，銀行がどのような役割を果たしたか検討しているが，これらは銀行の性質そのものに対しては特に分析はしていない。

天津が最も発達した金融都市であったが，これらの都市の金融にはそれぞれ異なる特徴があった。概略的には，上海は貿易，産業などの中国経済の中心であり，銀行は商業色が強く，首都北京や北京に最も近い開港地である天津は政治的影響を強く受け，銀行は軍政機関との取引を多くしていた。こうした銀行の特徴の相違は，1930 年代以降の貸付市場の再編過程において如何なる意味を持ったのであろうか。

以上の問題意識に基づき，本稿は北京，天津に拠点を置いていた最有力の民間銀行の一つである金城銀行を中心に，上海に拠点を置いていた最有力の民間銀行である上海商業儲蓄銀行と随時比較しつつその貸付について分析し，1930 年代の貸付市場の再編過程において個々の銀行経営の特徴が持った意味について検討することを課題とした。

本稿の構成は以下の通りである。まず，第 1 節で 1920 年代の銀号と銀行の諸特徴と地域的特徴の関係を明確にする。次に，第 2 節で 1927 年の協和貿易公司の倒産から 1930 年代の恐慌期における銀号と銀行の貸付状況を分析し，貸付市場がどのようにして再編されることが求められていたかを考察する。そして第 3 節で，1930 年代の金城銀行と上海商業儲蓄銀行の経営展開を分析し，1920 年代からの地域的特徴を反映した銀行の経営方針の相違によって，この時期の貸付市場の再編に与えた影響に差異が生じていたことを指摘する。

1　1910 年代～1920 年代の銀号，銀行の経営状況と地域的特徴の関係

(1)　1910 年代～1920 年代の銀号，銀行と地域的特徴の関係

1910～1920 年代の中国において，上海は全国の金融の中心であり，天津は華北金融の中心であった。開港以来，天津の対外貿易は慢性的な入超であったが，1910 年代に入るまでには，羊毛や綿花などの輸出商品が外商によって開拓され，天津は中国有数の貿易港となった[(6)]。上海，天津とも貿易や外為は，租界に拠点を置いた外国商社や外国銀行の影響力が極めて大きかったが，国内の流通金融は上海では銭荘，天津では銀号と呼ばれる無限責任の在来の小銀行が担うようになっていた。

銭荘，銀号の重要な特徴の一つとして，既に述べたように無限責任制を敷いており，資本金が少額であったことが挙げられる。銀号の資本金は，天津においては大体 1 万～10 万元で，1920 年代前半の日本の通商局第二課の調査書では，世話公と呼ばれる銀号が 20 万元で群を抜いていた[(7)]。上海

(5)　岡崎清宜「恐慌期中国における信用構造の再編――1930 年代華北における綿花流通，金融を中心に」『社会経済史学』第 67 巻第 1 号，2001 年 5 月は，1930 年代前半の恐慌期における華北の流通金融における銀行の銀号の業務の代替化過程を詳細に分析したもので，李一翔『近代銀行与銭荘関係研究』学林出版社，2005 年は，銭荘，銀号と銀行の関係が戦間期を通してどのように変容したかを分析したものである。

(6)　リンダ・グローブ「第四章　華北における対外貿易と国内市場ネットワークの形成」杉山伸也，リンダ・グローブ編『近代アジアの流通ネットワーク』創文社，1999 年など。

の銭荘においてはこれが30万両以上に上ることもあり[8]，天津よりは規模が大きかったが，それでも資本が数百万元に達することもあった銀行に比べれば，規模は小さかった。こうした資本規模の小ささを補うため，大型の銀号は同業間の貸借証である撥碼を用い，自己資本の何十倍もの資金を取り扱った。この撥碼は預金無しで振り出すことが可能であった[9]。つまり，銀号の資金調達は完全に人的信用に基づいており，一つの債務不履行が，簡単に債務不履行の連鎖に繋がる危険性を持つものでもあったと言える。

銀号の顧客との取引については，同一の地域出身者で組織された同郷帮という，人的信用を把握出来る比較的狭い範囲で行われるのが普通であり，これによって銀号は手続きが簡易な信用貸付を積極的に扱うことが出来た。また，銀号は通常支店を持たなかったが，銀号の全国の店舗は1920年時点で，河北省364店，山西省365店，陝西省114店，江蘇省337店，浙江省は1919年時点で273店と各地に数多くあり，銀号業全体としての業務範囲は全国の広範囲に及んでいた[10]。

一方，銀行は既に述べたように銀号と比較して資本規模が大きく，欧米式の有限責任制を採用していた。銀行には支店制度があり，有力な銀行はこの時期には既に大都市を中心にいくつか支店を設立していたが，銀行の行数，特に内陸部への出店は少なく，銀行全体の業務範囲では銀号に及ばなかった[11]。銀行の預金貸付は同郷の枠組みを越えて行われており，それ故貸付時には抵当貸付が志された。

このように異なる特徴を持っていた銀号と銀行ではあるが，銀行の撥碼の受け入れの是非など，対立の種を孕みつつもこの時期には友好関係にあり，銀号と銀行の人材の交流なども盛んに行われていた[12]。貸付については，概況としては，銀号は比較的小規模の商工業者に対して信用貸付をしたのに対し，銀行は比較的大規模の商工業者或いは政府機関等に原則としては抵当貸付をしたのであり，銀号と銀行の貸付には棲み分けがなされていた。

銭荘，銀号及び銀行が発行した信用通貨は，市場に広く流通した。銭荘支払いの手形である荘票は極めて高い信用があり，上海やその附近では通貨同様に流通するなど，極めて重要な役割を担った。一方，天津の銀号の振り出した手形には広い流通は見られず，政府系の中国銀行，交通銀行の

---

(7)　通商局第二課『支那金融事情』出版社不明，1925年，524～529頁。

(8)　『支那金融事情』出版社不明，1925年，389～393頁。当時，上海で流通していた銀元1元＝0.725両ほどであったので，これは41万9,600元であると考えられる。

(9)　南満州鉄道株式会社調査課『天津の銀号』出版社不明，1942年，40頁。

(10)　中田昭一「第二章　華北における近代銀行業と銀号」曽田三郎編著『近代中国と日本――提携と敵対の半世紀』御茶の水書房，2001年，50～51頁。

(11)　中国銀行総管理処経済研究所『全国銀行年鑑』出版社不明，1936年，A23頁。銀行の総行数は1920年時点で201行であり，銭荘，銀号の総数より遥かに少なかった。

(12)　岩間一弘「人事記録にみる近代中国の銀行員の給与，経歴，家族――上海商業儲蓄銀行を中心に」『アジア経済』2006年4月。楊固之，談在唐，張章翔「天津銭業史略」中国人民政治協商会議天津市委員会 文史資料研究委員会編『天津文史資料选輯　第二十輯』1982年，107頁。

銀行券が信用通貨として重要な役割を果たした。この点で天津金融界における銀号の地位は，上海の銭荘ほどのものではなかったと言える。[13]

両地で流通していた金属通貨にも，また相違が見られた。1914 年の国幣条例以降，各地で秤量貨幣である銀両が，コイン型の通貨である銀元に代替されていき，1920 年代には天津を含むほとんどの都市で流通は途絶し，虚銀両と呼ばれる，都市毎に異なる銀両建ての帳簿上の単位のみが慣習的に使用されるに過ぎなかった。[14] しかし，上海においては銀両と銀元の市場相対価格の取り決めを行っていた銭荘，銀両を大量に保有していた外国銀行という二つの勢力の抵抗が特に強く，銀両建ての取引が非常に盛んで，銀両そのものも市場で流通していた。[15]

このように天津の銀号には上海の銭荘ほどの力は無く，それが信用通貨，金属通貨の流通状況にも反映されていた。この意味で，天津では銀号が主に取引相手としていた中小商工業者への貸付について，相対的な脆弱性があったと言えよう。それでは，天津の銀行の状況はどうであったのか。以下，金城銀行の経営状況を分析し，具体的状況を検討していく。

(2) 1920 年代の金城銀行

金城銀行は 1917 年天津に本店を置いて設立され，1920 年代には他に北京，上海，漢口，大連に支店を構えていた当時最有力の私営銀行である。[16] 当時は，上海に本店を置き，華東を活動の拠点とした上海商業儲蓄銀行，浙江実業銀行，浙江興業銀行が南三行と呼ばれ，天津や北京に本店を置き，華北を活動の拠点とした塩業銀行，大陸銀行，中南銀行，そして金城銀行が北四行と呼ばれ，共に中国を代表する銀行群であった。金城銀行は北四行の中でも最も経営規模が大きく，指導的立場にあった。創設者であり 1949 年まで総経理を務めた周作民は各方面に人脈を持ち，特に政府系の銀行である交通銀行と安徽系軍閥とは深い関係にあった。[17]

創設時の金城銀行にはそうした周作民の人脈が特に反映されており，1917 年時の資本金の 90 %以上が軍閥，官僚による出資であった。[18] また，預金に関しても同様の傾向が見られる。金城銀行の会計は商業部と儲蓄部で構成されていたが，表 1 を見れば，預金の大部分は個人と機関団体からのものであったことが分かる。それらが具体的にどのような顧客であったか資料からは判然としないが，出資者の状況から軍閥と官僚をかなり含んでいたと考えられる。

---

(13) 中田昭一「第二章　華北における近代銀行業と銀号」曽田三郎編著『近代中国と日本――提携と敵対の半世紀』御茶の水書房，2001 年，47～54 頁。

(14) 宮下忠雄『中国幣制の特殊研究』日本学術振興会，1952 年など。

(15) 通商局第二課『支那金融事情』107 頁。

(16) 中国人民銀行上海市分行金融研究所『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，65～66，254 頁。北京には他に総経理処があり，ここで会計の取りまとめや各種重要文書の処理などを行っていた。

(17) 許家駿等編『周作民与金城銀行』中国文史出版社，1993 年，2 頁。

(18) 『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，23 頁。

表１　金城銀行の預金者類型及び割合

（単位＝％）

年次	個人		機関団体		公司商店	
	商業部	儲蓄部	商業部	儲蓄部	商業部	儲蓄部
1917	38.15	n.a	49.38	n.a	12.49	n.a
1921・1922	46.25	80.54	37.52	19.46	16.23	0
1928	50.87	79.61	35.47	20.39	13.36	0

出典：中国人民銀行上海市分行金融研究所編『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，142 頁。2 段目に関しては，商業部は 1921 年，儲蓄部は 1922 年のデータである。

表２　金城銀行貸付総額及び貸付対象類型

（単位＝元）

	1919 年		1923 年		1927 年	
	金額	割合（％）	金額	割合（％）	金額	割合（％）
総計	5,563,674	100.00	13,334,893	100.00	27,386,314	100.00
工業	834,340	15.00	4,259,080	31.94	6,996,253	25.55
商業	1,757,400	31.59	2,538,616	19.04	4,316,242	15.76
個人	981,414	17.46	2,899,172	21.74	6,662,114	24.33
鉄道	217,840	3.91	801,824	6.01	4,009,612	14.64
軍政機関	1,731,529	31.12	2,176,433	16.32	3,932,498	14.36
その他	41,151	0.74	659,768	4.95	1,469,595	5.36

出典：『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，155 頁。

表３　金城銀行商業貸付の顧客層

（単位＝元）

分類	1919 年			1923 年			1927 年		
	戸数	金額（元）	割合（％）	戸数	金額（元）	割合（％）	戸数	金額（元）	割合（％）
総計	115	1,757,400	100.00	252	2,538,616	100.00	239	4,316,242	100.00
金城附属事業及び主要投資人経営商号	1	476,210	27.10	4	469,330	18.49	5	1,821,055	42.19
各種公司，商店	25	555,378	31.60	42	1,167,905	46.01	51	1,103,008	25.55
その他	89	725,812	41.30	206	901,381	35.50	183	1,392,179	32.25

出典：『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，175 頁より作成。各種公司，商店には，綿糸・綿花，塩，建築材料，南北貨物，貿易公司などがあった。

表２は，貸付の対象の推移である。金城銀行の貸付の対象は商工業者に限らず個人，鉄道，軍政機関と多岐に渡っており，北京からの政治的影響の強さと発達した商工業が併存しているという，天津の特徴を反映したものとなっている。(19)

(19)　個人と分類されたものは，実質的な商業貸付を多く含んだ。また，鉄道は政府が管理した分野であるので，この時期の金城銀行の貸付は大きく分けて商工業と政府関連機関の 2 分野であったと考えられる。

表 4　金城銀行工業貸付の顧客

（単位＝元）

	貸付金額					
	1919 年	戸数	1923 年	戸数	1927 年	戸数
10 万元以上の顧客の合計	1,782,744	3	9,585,870	10	15,540,711	15
1 万 1 元以上～10 万元未満	187,543	6	877,683	26	1,079,129	33
1 万元以下	4,839	7	189,293	77	128,034	77
全顧客合計	1,975,126	16	10,652,846	113	16,747,874	125

出典：『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，157～160 頁。

表 3 は金城銀行の商業貸付の詳細である。その他の項目は，5,000 元以下の顧客と業種の判別がつかない顧客であり，小口の貸付先と見ることが出来るが，この割合は年々下がっている。また，1923 年と 1927 年を比較すれば，貸付総額は増加しているのに対し，貸付先は減少している。1927 年の金城附属事業及び主要投資人経営商号への貸付について言えば，これはグループ内企業の資金融通とも言うべきものであるが，1,821,055 元の内，1,333,342 元が公債売買を取り扱った豊大号という金城銀行の 100 %出資会社に対してのもので，周作民が日本での留学時代に学んだ，産業と一体となって銀行業も成長するという日本の財閥の手法を念頭に置いていたと考えられる。(20)

工業貸付については，表 2，表 4 からは，1919～1923 年において 15 %から 31.94 %に，顧客数は 16 戸から 113 戸に急増していることから，この時期は開拓期であったことが分かる。その後 1923～1927 年は，全体に占める工業貸付の割合は低下し，顧客数の伸びも 113 戸から 125 戸に鈍化しており，特に 1 万元以下の顧客数は全く増えていなかった。この時に 10 万元以上の顧客層は，1919～1923 年に比べれば増加率は低いものの，他の顧客層に比べれば格段に高い貸付額の増加があり，顧客数に関してもそれなりの伸び率を維持していた。1927 年の 10 万元以上の貸付先には，天津有数の紡績工場であり，軍閥によって経営されていた裕元紡績公司，恒源紡績公司等の紡績工場を中心に，周作民の友人であった范旭東の経営していた久大精塩公司，永裕制塩公司といった化学工場，他に面粉，開鉱，鉄鋼といった分野が含まれていた。(21) このように大口工業貸付には，軍閥や周作民と友人関係にあった者が経営する工場を多く含んでおり，金城銀行の工業貸付は，総経理の周作民の個人的な人脈に負うところが大きかったと言えよう。また，こうした情実的とも取れる貸付は，裕元紡績公司や上海の溥益紗廠等に見られるように，巨額の不良債権を抱える結果ともなった。(22)

金城銀行は，銀号が取引相手としていたような中小商工業者への貸付に対しては消極的であった

（20）久保亨『戦間期中国の綿業と企業経営』汲古書院，2005 年，194～195 頁。

（21）乙嘱託班工業班『天津ニ於ケル紡績工業』1936 年，3 頁。『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，30 頁，169 頁。佐野健太郎「幣制改革期における銀行融資――金城銀行の事例を中心に」『高知論叢・社会科学』第 45 号，1992 年 11 月など。

（22）久保亨「第 2 章　上海新裕（溥益）紡――技術者主導の経営改革」『戦間期中国の綿業と企業経営』汲古書院，2005 年。

ので，貸付対象の棲み分けは比較的明確であった。中小商工業者は貸し倒れのリスクが高く，経営状況を審査するための時間や費用も多く必要としたからである。そのためか，華北においては銀行と銀号の抗争があったという事実は，資料上からは確認出来ない。この点で，金城銀行と銀号の関係は，先に見た銀行と銀号の関係の概況にかなり合致するものであった。

以上，1920 年代の金城銀行の経営状況の分析を行ってきた。金城銀行は，軍閥，官僚との関係の深さ，総経理の人脈に基づく大口顧客の重要視といった特徴を持ち，天津を本拠地とした強みを遺憾なく発揮出来るように経営展開を行っていた。また，グループ内企業の資金融通や，大工場への積極的な融資など，産業と一体となった発展を志していたが，多くの貸付先が不良債権化するなど，この時期には未だに多くの課題が残されていた。続いて，銀行経営の地域性を比較するため，上海に拠点を置き，後に中国第一の民間銀行に成長した上海商業儲蓄銀行の経営状況を見ていく。

(3) 1920 年代の上海商業儲蓄銀行

上海商業儲蓄銀行は上海銀行とも呼ばれ，1915 年に上海に設立されてから着々と経営を拡大し，1930 年代には中国随一の民間銀行となった銀行である。創業者の陳光甫は，上海銀行を創設してから，戦後に至るまでの期間ずっと総経理を務めており，戦間期を通して，陳は上海銀行の経営に大きな影響を与えた。

1920 年代の上海銀行は，金城銀行と異なり，軍閥や官僚との関係も少なく，純然たる商業銀行であった。資本金の状況は不明瞭であるが，預金については，1922 年には個人預金の割合が 4 割に上っており，商工業者による預金は 5 割を超えていた。[23] また，表 5 からは，貸付状況についてのある程度の分析が可能である。これを見ると，商業貸付が 5 割を超えており，更にこれに工業貸付を加えると 74.67 %となり，貸付の大半が商工業貸付であったことが分かる。また，政府機関への貸付は 1.38 %に過ぎず，政府との取引は少なかった。

次に，商工業貸付の貸付先について見ていく。上海銀行は，1926 年時点で国外為替処を含めて 18 の支店を有し，[24] また，銭荘の出身者を積極的に取り入れ，商業貸付の範囲を積極的に拡大した。1926 年時点での貸付額は 9,927,614 元で，1927 年時点での金城銀行の 4,316,242 元の約 2.3 倍と規模も大きく，商業貸付は明らかに上海銀行の貸付の要であった。この貸付は比較的短期で小口のもので，地元内外の商店などとも取引関係があった。貸付先は銭荘と重なることもあり，南通，常州，蕪湖などでは銭荘の排斥運動にあっており，銭荘との貸付先の棲み分けは金城銀行ほど明確ではなかった。[25]

(23)「上海銀行档案“往来部業務報告”1923 年」，中国人民銀行上海市分行金融研究所編『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，98 頁。

(24)『上海商業儲蓄銀行史料』193 頁。

(25)「上海銀行編“二十年史初稿”第 135～137 頁」『上海商業儲蓄銀行史料』83～84 頁。

表 5　1926 年時点の上海銀行の貸付対象額，及び割合

（単位＝元）

項目	金額	割合（%）
総計	18,127,529	100.00
工業	3,607,942	19.90
商業	9,927,614	54.77
政府機関	250,104	1.38
鉄道	171,168	0.94
個人	3,771,814	20.81
交通運輸	93,127	0.51
文化教育	212,244	1.17
医療衛生	4,503	0.03
公用事業	12,196	0.07
その他	76,817	0.42

出典：中国人民银行上海市分行金融研究所編『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，193 頁。

一方，工業貸付は大口の顧客を重視した。顧客数も 1926 年時点で 56 廠と少なかった。しかもこの貸付のうち大生紡績公司への貸付額は 1,136,160 元で，工業貸付総額の 31.35 %を占めるなど，上海銀行の工業貸付は，少数の大口顧客に集中的に貸し付けるという方針が取られていた。しかし，その規模は金城銀行と比較すると小規模なもので，1926 年時点での貸付額は 3,607,942 元で，1927 年時点での金城銀行の工業貸付額 6,996,253 元の約 5 割強に止まっていた。(26)

上海商業儲蓄銀行の収益構造について言えば，総利益に占める有価証券の割合の少なさは一つの大きな特徴である。図 1 は，金城銀行と上海銀行の総利益に占める有価証券損益の割合の推移であり，金城銀行と比較した時の上海銀行の有価証券損益の割合の少なさを確認出来る。当時の中国の市中に出回っていた有価証券は，その大部分が北京政府の発行した公債であったので，図 1 は，両行において収益上の公債売買の重要度に差異があったことを示している。

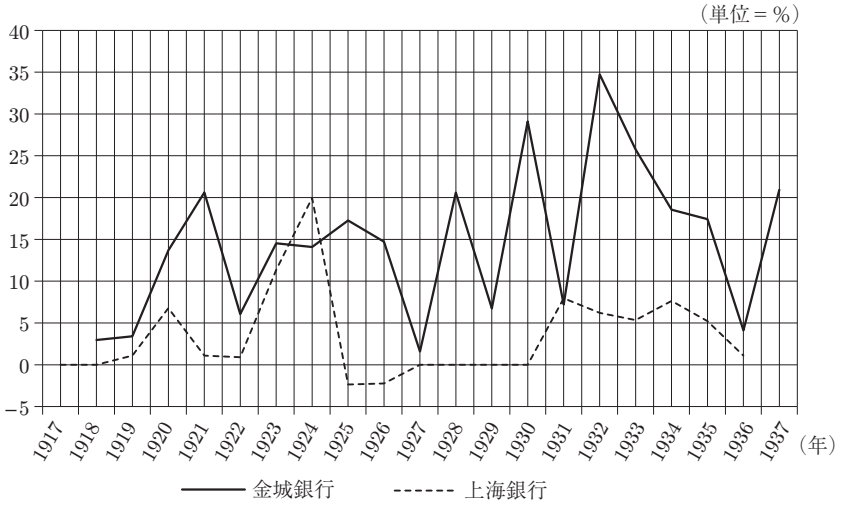
こうした両行の公債売買収益の差異は，それぞれの本拠地の特徴が反映されていると思われる。北京政府時代，公債の発行は北京で行われ，政府系銀行の中国銀行と交通銀行がこれを担保として政府に貸し付け，両銀行は資金繰りが上手くいかない時には，これを市場に売り出して工面したのである。市場に出回った公債は，民間においても貸付の担保として利用されると同時に，単純に満期まで保有する「投資」，価格の高低を見計らって満期前に売買を行い，差額を稼ぐ「投機」などと組み合わせられ，(27) 北京，天津の民間銀行の収益の重要な源泉ともなっていた。(28) 金城銀行の有価証券

(26)「据上海銀行 1926 年決算表編制」『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，162～163 頁。

(27) 呉承禧著，玉木英夫訳『支那銀行論』東京叢書閣版，1937 年，102～104 頁。

(28) 王宗培『中国之内国公債』長城書局，1933 年。

図１　金城銀行と上海銀行の総利益に占める有価証券損益の割合



出典：『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，40，356～357 頁，及び『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，280，715 頁より作成。

損益の割合の相対的な高さも，こうした事情が影響していたと考えられる。

一方，上海においても公債の流通量は多かったが，陳光甫は当時の公債売買による銀行の畸形的発展に対して極めて批判的であり，短期的利益よりも社会の発展に尽くす銀行サービスを提供し，健全な経済成長の中から利益を獲得することを志していた。[29] 金城銀行もそうした経営理念を持ってはいたが，[30] 北京，天津を本拠地としているという関係上，公債売買を扱わない経営というのは現実的には困難であった。

(4)　金城銀行と上海銀行の特徴の比較

上海銀行の商工業貸付について，金城銀行と比較するならば，全体として金城銀行は工業貸付重視，上海銀行は商業貸付重視であったと言える。金城銀行は，軍閥や官僚方面に強い人脈を持っていたため，彼らの経営する工場への貸付の比重が高くなった。

一方，上海銀行の貸付の重点は商業貸付であり，営業範囲の拡大にあたっては銭荘の手法を積極的に取り入れ，銭荘が顧客としていたような中小商人にも貸付を行った。工業貸付に関しては，金城銀行以上の大口顧客への集中貸付を行い，商業貸付と方針が異なっていた。このような上海銀行の経営展開の在り方は，中国の民族商工業の急発展の中心地としての上海の地域性を如実に反映していたものであったと言えよう。

ここで，両行の資産負債状況を見ておこう。表 6 は，両行の 1917～1927 年における，資産と負

(29)「上海銀行編“本行之回顧与前瞻”」『上海商業儲蓄銀行史料』58～59 頁。
(30)　天津市財経大学・天津市档案館編『金城銀行档案史料选編』天津人民出版社，2011 年，21 頁。

表 6　1917～1927 年に於ける金城銀行と上海銀行の資産，負債総額に占める科目の割合

（単位＝%）

		金城銀行	上海銀行
資産	現金	14.55	5.75
	同業貸付	18.31	18.74
	貸付	50.06	37.90
	有価証券	9.61	7.53
	不動産	3.07	2.06
	領用準備金	0.00	4.41
	その他	4.39	23.62
負債	資本金及び公積金，内部留保	17.13	8.90
	預金	72.67	60.21
	領用兌換券	0.00	6.22
	為替資金	0.60	10.63
	その他	6.25	12.69
	純益	3.37	1.35

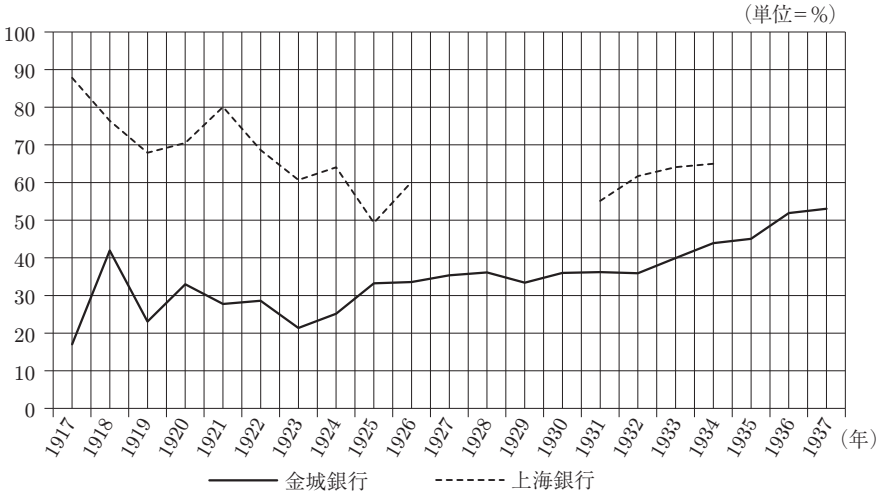
出典：『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，116～117 頁，及び『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，258～261 頁より作成。

債の合計額に占める各科目の平均割合を示したものである。資産については，金城銀行のほうが現金，顧客への貸付，有価証券の割合が高く，上海銀行は満期前の手形や，購入した電信為替などを多く含むその他の項目の割合が高かった。負債については，金城銀行は創設期の人脈を反映してか資本金，及び公積金，内部留保と預金の割合が高く，上海銀行は為替資金，満期前の手形を多く含むその他の項目の割合が高いという差異があった。手形の期限は貸付よりは短かったであろうことを考慮すると，上海銀行の資産，負債構成は，金城銀行と比べて短期性の項目を多く含んでいたと言えるであろう。これは，上海銀行が銭荘の手法を取り入れて，商業貸付を積極的に拡大したことと関連していると考えられる。しかし，上海銀行のこうした経営の在り方は，収益効率という点では金城銀行に及ばず，総資産利益率において両行には大きな開きがあった。また，上海銀行に見られる領用兌換券とは，銀行券発行の特権を保有していない上海銀行が，銀行券発行の特権を有する政府系の中国銀行に，規定の準備金を納めることで発行した銀行券のことである。一方，金城銀行は天津を本拠地としていた関係上，中央政府や政府系銀行の干渉を避ける必要があったため，北四行と連合で四行準備庫を組織し，ここを通じて銀行券を発行した[31]。また，流通せずに行内に置かれた銀行券は，現金の勘定に含まれたため，上海銀行よりも現金の割合が高くなっていたと考えられる。

以上，金城銀行と上海銀行の経営状況が，どのように本拠地の地域的特徴を反映していたのかを

(31)　諸田博昭「1910 年代～1930 年代中頃における華北の銀行経営と貨幣制度」『社会経済史学』第 77 巻 4 号，2012 年。

図２　金城銀行と上海銀行の総貸付額に占める抵当貸付の割合の推移



出典：『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，156，367 頁，及び『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，264，627 頁より作成。

見てきた。最後にもう一つ両行の貸付の重要な特徴を述べておく。図 2 は，両行の全貸付額に占める抵当貸付の割合の推移である。これを見ると分かるように，1920 年代の金城銀行の抵当貸付割合は低位で推移しており，上海銀行のそれもこの時期には下降傾向にあった。両行は抵当貸付を原則としつつも，中国社会の実情に合わせて，信用貸付も行わざるを得なかったと考えられるのである。また，両行の抵当貸付の割合に差があった原因については，軍閥，官僚には信用貸付や，実質的な信用貸付である抵当貸付が多かったことに由来すると考えられる。(32)

こうした銀行の貸付の実情は，次節で述べるように，1927 年の協和貿易公司の倒産の顚末に顕著に現れており，そうした信用リスク管理体制の問題点への対応は，1930 年代において銀号と銀行のその後を規定することとなった。

2　銀号，銀行の信用リスク管理と恐慌下における貸付市場の動揺

(1)　協和貿易公司の倒産

協和貿易公司とは，1920 年代の後半には天津本店の他に大連，青島，上海，漢口に支店を構え，当時中国人によって経営されたものの中では有数の規模を誇った貿易公司である。協和貿易公司の創業者であり，総経理でもあった祁仍奚は山西省出身であったが，後に天津本店の経理に元交通銀行役員の王恭寛を招いたことで，公司は巨額の銀号，銀行融資を受けることが出来，経営を急拡大させることに成功した。主要な業務は，国内商品の輸出と海外商品の輸入であり，イギリスやフラ

(32)　龔関『近代天津金融業研究（1861–1936）』天津人民出版社，2007 年，170～193 頁。

ンスの洋行との取引もあった。こうした洋行との取引は，協和貿易公司が銀号，銀行から信頼を獲得する一つの要因ともなった。[33]

このように，協和貿易公司は，一見順風満帆な成長を成し遂げていたかのように思われていたが，その実，企業の体質としては祁仍奚のワンマン経営や経費の使い込みの常態化など問題が多く，また，経営のほうも本業の貿易よりも投機を重視するようになってこれに失敗した結果，多額の損失を出していた。しかし，祁仍奚は，取引先の揣通貨桟との共謀で偽の貨物証券を発行し，このような問題を外部から隠蔽し続けていた。[34]

しかし，1927 年 7 月 9 日，中国銀行の林鳳苞は，協和貿易公司が多額の債務を抱えているのを発見した。祁仍奚と揣通貨桟の行動を監視し，貨桟の調査をすることになると，祁仍奚は馬脚を表し，すぐに揣通貨桟を封鎖した。その後，祁が債権者の詰問にあう中で，実際の貨物の額が，貨物証券の合計額よりも遥かに少なかったことが判明した。そして 7 月 10 日，協和貿易公司の倒産が確実なものとなった。[35]

後の調査によれば，協和貿易公司に最も多く貸し付けていた中華懋業銀行と中元実業銀行は，それぞれ 100 万元と 60 万元を貸し付けていたが，これらは全て信用貸付であった。[36] このような事情について，淑儀は『銀行月刊』に掲載された論文で以下のように述べている。

「協和貿易公司は 1926 年に営業報告を発表した。それによると，実収資本は 50 万元しかなく，その一部は揣通貨桟へ投入し，一部は資産と外貨の購入に充てていた。活動資金はなかったと言える。協和貿易公司への銀行，銀号の貸出金額は合計で 800 万元以上に達した。上記の営業報告が信頼できるものであるかどうかに関わらず，当該公司の実質調査において必須のものである。巨額の貸出をしたものは，（こうした営業報告に……筆者注）ざっと目を通してすらいなかった。……個人を盲信し，機関の実質を見ようとしていない。これはその一例である。[37]」

協和貿易公司の倒産後，中華懋業銀行と中元実業銀行のような信用貸付はもちろん，実物の裏付けの無い貨物証券を担保とした貸付の回収も困難を極めた。協和貿易公司に対する銀行の担保貸付は，担保貸付としての実質を伴っていなかったと言えるであろう。

---

(33)「国内財政経済」『銀行月刊』第 7 巻第 7 号，1927 年 7 月，1 頁。
(34)「国内財政経済」『銀行月刊』第 7 巻第 7 号，1927 年 7 月，1 頁。
(35)「国内財政経済」『銀行月刊』第 7 巻第 7 号，1927 年 7 月，2 頁。
(36)「国内財政経済」『銀行月刊』第 7 巻第 7 号，1927 年 7 月，2 頁。
(37) 淑儀「天津国内金融之観察」『銀行月刊』第 7 巻 12 号，1927 年。以下は，原文である。
「協和貿易公司其公布之十五年営業報告，実収資本不過五十万元耳，尚有一部分投入与揣通貨桟，一部分購置産業及外貨。活動資金可称無有。及各銀行号対於該公司放款，竟能至八百万元以上。上項営業報告，無論其是否可恃，要為考査該公司実質之一要具。以鉅資貸給与該公司者，不能併此報告而不一覧。……其迷信個人之深及其不察機関之実質。誠所口見，此一例也。」

協和貿易公司には，銀号も多額の貸付を行っていたので，銀号の被害も甚大であった。協和貿易公司の倒産によって，撥碼による貸付に焦げ付きが生じ，負債の連鎖によって天津経済の循環に大きな打撃を与えた。この混乱はほどなくして収まるものの，10 月 11 日には志成銀号が，10 月 15 日には盛徳銀号が相次いで倒産したことで，事態は再び紛糾する。天津を代表する二つの大銀号の倒産による金融不安も，銀行界の働きによって大事には至らずに沈静化するが，協和貿易公司の倒産時における，銀行の撥碼への批判は更に強いものとなった。その結果，10 月 18 日には銭商公会にて，同業で取引を開始する時には預金を持たなければならないことが決定した。これによって，預金を持たないでも撥碼取引の開始を可能としていた慣習は，消滅することとなった[38]。対人信用による営業が，商工業の発展の程度に適合しなくなりつつなっていたことで，銀号の強みの一角が崩されたと言えよう。

協和貿易公司が倒産した時期には，銀号と銀行の信用リスク管理への意識は，共に時代と合致しなくなっていた。銀行の貸付は，出来るだけ抵当貸付を行うことを志してはいたものの，信用貸付も多く，貸付に際しての審査は雑で，抵当品の信頼性についてはほとんど気にかけていなかった。また，貸付に際しては交通銀行や洋行といった社会的な名声を盲信しており，近代的な信用リスク管理とは程遠いものであった。

しかし，銀号側においては，協和貿易公司への貸し倒れによる損失以外にも，撥碼という経営の強みの一角が崩されたという点で事態はより深刻であった。商工業者の増加と規模の拡大によって，従来のように対人信用で貸付を行い，撥碼を発行することが難しくなっていた。

この後，1930 年代になると，中国は未曾有の経済恐慌を経験することとなる。その時に，銀号，銀行はどのように対応し，1920 年代からどのような変化が生じたのであろうか。

(2) 1930 年代前半の恐慌下における貸付市場

1930 年代に入ると，銀本位国であった中国でも世界恐慌の影響が深刻化し始める。天津に於いて景気の悪化の深刻さは，輸出入額の減少[39]，卸売においては卸売物価指数の急落となって現れたが[40]，こうした状況は程度の差はあれ，都市部では普遍的に見られた現象であった。

内陸部の景気や治安の悪化は特にひどく，1920 年代の末頃からは，農作物の不作等による移出の減少[41]，内陸部の治安の悪化による銀元の都市部への逃避という現象が見られるようになる[42]。こうし

(38)「各埠金融」『銀行月刊』第 7 巻 10 号，1927 年 10 月，3～4 頁。

(39) 姚洪卓『近代天津対外貿易　1861～1948』天津社会科学院，1993 年，52 頁。

(40) 中国科学院上海経済研究所，上海社会科学院経済研究所編『上海解放前後物価資料匯編（1921 年–1957 年）』上海人民出版社，1958 年，91～92 頁。1930 年代以降は，天津以外にも上海，広州など主要都市で，1935 年の幣制改革に至るまで卸売物価指数は下がり続けていた。

(41)「大公報」1929 年 6 月 6 日。これは，内陸部の都市部に対する入超に結びつく。

(42) 朝鮮銀行東京総裁席外国為替課『天津に於ける金融機関に就いて』6～11 頁。

た現象は1930年代に入って更に顕著になり，都市部に逃避してきた銀元は，銀号や銀行に大量に預金された[43]。しかし，銀号や銀行，特に銀号はこうして流入した銀元預金の優良な運用先の獲得に苦慮することとなる。以下は「大公報」の記事の引用であり，その様子がうかがえるものである。

「（1933年の）銀銭業……資金はだぶつき，利率は大幅に落ち，余剰資金はますます多くなり，投資が争うように盛んになっている。（昨年の）下半期に成立した銭荘・銀号の多数は，交易市場で主席（トップ）になろうとするものが多くを占めており，預金・貸付に重きを置いている銭荘・銀号は，勢力を失墜している状況にあると言える[44]。」

ここからは，内陸部から天津に流入した大量の銀を吸収したものの，恐慌の本格化によって貸付を行えずに立ち往生していた銀号の姿が浮かび上がる。1934年9月頃の「大公報」によれば，貸付を営む銀号はほとんどいないという状態であった[45]。こうした銀号の貸付の停滞あるいは減少は，全国的に見られた現象であり，詳細な経営史料の残っている上海の有力な銭荘である福康銭荘，福源銭荘，順康銭荘の1930～1935年における総貸付額は，減少或いは停滞していた[46]。

天津の銀号の余剰資金は投機に向かった。その投機とは，主要には足金や老頭票，標金などの取引であり，数は少ないものの，公債売買が兼営されることもあった[47]。足金とは純金のことであり，老頭票とは朝鮮銀行が主に中国東北地方で発行した金建ての紙幣のことである。標金は，品位1,000分の978の長方形の金塊であり，ロンドン金塊相場ではこの標金が取引された。1920年代からの趨勢は銀安金高であったことから，これらは盛んに取引された[48]。アメリカが白銀政策を実施して以後は，金の価格が下落気味であったので，損失を計上した銀号も少なくなかったが，長期的に見てこれらの投機は銀号にかなりの利益をもたらしていた。資料の制約で具体的な利潤額を知ることは出来ないが，1927年に30家だった天津の銀号が，1935年には142家にまで増えていたことから，この投機が銀号にもたらした利益が如何に大きなものであったかをうかがい知ることが出来る[49]。

銀行もまた，この時期には盛んに公債売買を行った。中国銀行の調査によれば，主要銀行に於い

（43） 井村薫雄『東亜経済講座1　世界の銀と支那の通貨』東亜経済学会，1936年，80頁。当時の中国の銀の輸出入は上海を中心にして行われていたが，上海の在銀高は1929年からアメリカの銀購買政策が始まる1934年まで急増していたことなどから，中国の都市部全体で余剰銀元が増加していたと考えられる。

（44）「大公報」1934年1月1日。以下は原文である。
「銀銭業……銀根則松，利率大落，遊資加多，投資争盛，下半年間新成立之銀銭号，多数為謀在交易市場占主席者，其向以注重存放款為業務者，逐呈進退失据之勢……」

（45）「大公報」1934年9月25日。

（46） 中国人民銀行上海市分行金融研究所編『上海銭荘史料』上海人民出版社，1960年，780～783，806～807，828～829頁。

（47）「大公報」1934年9月25日。

（48） E. カン著・宮下忠雄訳『カン支那通貨論――金及び銀取引の研究』など。

（49） 沈大年『天津金融簡史』南開大学，1988年，9頁。

て，1927 年に全資産に対して 7.14 %であった有価証券の保有割合は，1930 年には 9.57 %に増加し，1934 年には 12.36 %にまで上昇していた。[50] また，図 1 からは，この時期において金城銀行と上海銀行でも，全収益に占める有価証券損益の割合が上昇していたことが分かる。1930 年代前半には，金融業全体で投資，投機業務が盛んになっていたのである。

しかし，金城銀行の総貸付額自体は 1931 年に 45,273,946 元であったのが 1934 年には 89,580,596 元に，上海銀行の総貸付額は 1931 年に 67,068,400 元であったのが 1934 年には 127,127,683 元に増加しており，天津の銀号や上海の銭荘とは異なり，両行の総貸付額はこの時期に急増していた。[51] また，図 2 からは同時期に両行は抵当貸付の割合を上昇させていたことも確認出来る。つまり，両行に於いては，この時期に信用リスク管理の厳格化と貸付額の増加が同時に行われていたということである。銭荘，銀号と両行の貸付においてこのような差が生じた原因は何であったのであろうか。

この問題に関しては，銭荘，銀号と銀行の経営範囲の相違と，恐慌下における経済情勢の変化が大きく影響していたと考えられる。以下は，「大公報」の引用である。

> 「昨年の天津の各業界概況，銀号……，今春において銀号は，市場で資金がだぶついているため，各自これを運用する方法を画策した。また同時に，一般の多くの富裕者は，銀行の預金利率の低率なことを嫌い，銀号方面に資金を振り向けるようになったため，銀号業の中の比較的有能なものは，次々に株を募り，銀号を設立させ，一時は雨後の筍の如くであった。しかし，彼らの貸付の目標は厳格であり，名声があり，財力があって信頼できる商家に，貸付を行おうとした。しかし，如何せんそのような商家の数は甚だ少なく，しかも貸付金はいつも商家が必要な額を越えてしまうので，利率を下げなければお互いに軋轢が生じてしまう。……」[52]

銀号は，抵当貸付割合を高めると共に，貸付先を信頼確実な商家に絞ることで信用リスク管理を厳格化していたが，そのような商家は数が少なく，貸付を縮小させる結果となった。この記事からは，銀号の貸付の収縮は，貸付相手の獲得能力の低さに一つの大きな原因があったと考えられる。この記事の状況は，銀号の従来の比較的狭い範囲で営業を行い，手続きの簡易な信用貸付を提供するという方法が急速に通用しなくなっていたこと，そして従来強みとしていた同郷帮に基づいた営業範

---

(50) Bank of China, *An Analysis of the Accounts of the Principal Chinese Banks 1934*, New York and London: Garland Publishing, Inc, 1982.

(51) 『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，367 頁，及び『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，627 頁より作成。

(52) 「大公報」1935 年 1 月 1 日。以下は原文である。
「過去一年中津市各業概況，銀号……，今春彼等因鑒於過去銀根松動，遂各謀宣洩方策，同時復以一般富戸，多嫌銀行存款利率低微，乃転向銀号方面発展，故銭業中之較有活動能力者，粉粉集股成立銀号，一時如雨後春筍。但彼輩放款目標極厳，必須声望素著，殷実可靠之商戸，方予接済。無如此項商店，為数甚尠，且毎因借款超出需要以上，不借低減利率，互相軋……」

囲が，信頼出来る商家の獲得に於いて，逆に足枷となってしまっていたということを意味している。

貸付相手の不足と利率の下落という状況は，銀行にもある程度共通していた。しかし，決定的に異なったのは，銀行はこの時期に顧客の紡績工場等の業績が急激に悪化したことを受け，それらの顧客に追い貸しを行うと同時に，経営再建に乗り出すようになっていたことである。この過程に於いて企業内部の改革が行われ，南通の大生紗廠などでは経営状態に相当の改善が見られた。[53] 銀行は，抵当貸付割合を高めると同時に，貸付先のモニタリングを強化することでも，信用リスク管理を厳格化していた。ここに至って，ようやく 1920 年代からの杜撰な商工業貸付の信用リスク管理が改善されてきたと言えよう。この時に必要となった資金は巨額であり，銭荘，銀号の資金力では到底その需要に応じることは出来なかった。[54]

また，銀行は各地に支店を展開していたので，銀号よりも広い範囲で顧客を獲得していくことが出来た。1920 年には 201 行であった銀行の本店支店数は，1936 年には 1,791 行にまで増加していた。[55] 特に，1931 年の満州事変，1932 年の上海事変以降は，上海など主要都市で，銀行が貸付の抵当としてよく利用していた租界の土地不動産の価格が下落していたことを受け，銀行は土地不動産よりも比較的流動性の高い商品を担保として確保するため，内陸部へ支店を拡大させていた。[56]

上海では，貸付において 1920 年代全般で値上がり傾向にあり，市場で盛んに取引されて安全性も流動性も高かった租界の土地証券である「道契」が，抵当として非常に好まれていた。[57] 天津でも 1920 年代には租界の土地は盛んに取引されており，[58] 抵当として重要な役割を果たしていたと考えられ，租界の土地証券が銀行貸付を推し進めたという点では両都市は共通しており，1930 年の恐慌期に於いてそれが立ち行かなくなり，商品担保を必要とするようになった点では天津も同様であったと考えられる。既に述べたように，この時期には卸売物価は全国的に下がっていたので，商品担保貸付も担保商品の価格下落という問題を完全に克服することは出来なかったが，[59] こうした銀行の業務展開は貸付市場に新たな局面をもたらした。1930 年代の恐慌下の華北の綿花の流通金融に於いては，銀号の綿花の売り上げを返済資金の当てにした実質的な信用貸付は，銀行の荷為替に広く代替されるようになっていた。

---

(53) 富沢芳亜「銀行団接管期の大生第一紡織公司——近代銀行における金融資本の紡織企業代理経営をめぐって」『史学研究』第 204 号，1993 年。

(54) 『上海銭荘史料』上海人民出版社，1960 年，171 頁。

(55) 『全国銀行年鑑』1937 年，S33～34，S39 頁。

(56) 岡崎清宜「国民政府下中国における信用機構の再編——上海金融恐慌と貨幣市場を中心に」『史林』第 86 巻第 4 号，2003 年 7 月。

(57) 城山智子「第 3 章　企業借款」『大恐慌下の中国——市場・国家・世界経済』名古屋大学出版会，2011 年。

(58) 尚克強『九国租界与近代天津』天津教育出版社，2008 年，72～76 頁。

(59) 岡崎清宜「恐慌期中国における信用構造の再編——1930 年代華北における綿花流通，金融を中心に」『社会経済史学』第 67 巻第 1 号，2001 年 5 月。

金融機関の同業間貸借に於いても銀行の躍進が見られた。1932 年 10 月には，銀号と銀行の共同で天津金融界全体の集中決済機関である天津銀銭業準備庫が組織され，決済の効率性が大きく高まると同時に，撥碼は以前ほど重要な意味を持たなくなった[60]。また，天津銀銭業準備庫からは，預け入れた銀元に対してのみ振り出される預かり証によって決済が行われたので，撥碼による貸借よりも安全性も高いものであった[61]。この設立と運営には，政府系の中国銀行など銀行界が大きく尽力しており[62]，同業間貸借においても従来の銀号の慣習的貸借方法が，銀行によって新たな貸借方法に代わっていった。

1928 年には，北京，天津といった華北の主要都市は国民政府によって占領され，首都が北京から南京に移転されたことで，上海は中国の政治経済の中心地となった。前述した荷為替業務に於いては，華北の内陸部で綿花の出荷地を天津から上海へと変更する動きも同時に見られた[63]。1930 年代には流通金融だけでなく，金融のあらゆる局面で上海へ集中する動きが見られた。その過程で，金城銀行と上海銀行の商工業貸付の展開には，顕著な相違が生じていたが，それは貸付市場の再編に於いて如何なる意味を持っていたのであろうか。次節では，首都が南京に移転したことによって北京，天津の金融が縮小していく中で，金城銀行と上海銀行がどのような営業方針に基づいて商工業貸付を展開していたのか分析することとする。

3　1930 年代の銀行による貸付市場の再編

(1)　国民政府期の公債発行と北京，天津金融界

1930 年代の中国の金融の中心は，上海であった。北京政府期においては，金融の拠点は北京，天津，上海に分散されていたが，1927 年に国民政府が北伐を開始し，1928 年に首都が南京に移動してから，上海への一極集中化が進んだ。上海の政治的機能の高まりと商工業の更なる発展は，国民政府による全国統治の安定と軌を一にしていた。しかし，設立当初の国民政府の基盤は脆弱であり，馮玉祥の河南軍，閻錫山の山西軍，李宗仁，白崇禧の広西軍などの地方勢力が未だに割拠しており，内乱は止むことはなかった[64]。引き続く内乱による軍事費の拡大は国民政府の財政を困窮させ，財政赤字補塡のために北京政府時代よりも更に大量の公債が発行された[65]。

---

(60)　中国銀行股份有限公司天津市分行・中国人民政治協商会議天津市委員会文史資料委員会合編『卞白眉日記（第二巻)』天津古籍出版社，2008 年，191 頁など。

(61)「関于銀行銭業合組倉庫組員及営業報告（内有决算表)」（天津档案館所蔵資料 j0129–2–001563, j0129–2–001564）1935 年 7 月。

(62)『卞白眉日記（第二巻)』190～221 頁など。

(63)　岡崎清宜「恐慌期中国における信用構造の再編――1930 年代華北における綿花流通，金融を中心に」『社会経済史学』第 67 巻第 1 号，2001 年 5 月。

(64)　尾形勇，岸本美緒編『新版世界各国史 ――中国史』山川出版社，1998 年，389 頁。

1920年代において，公債は土地と並んで中国で最も頻繁に担保として利用されていた。金城銀行に於いても，担保として公債を用いていた可能性が高いことは，第1節で指摘した通りである。1932年の上海事変以降は，上海，天津などの主要都市で土地交易が停滞し，中国人の居住地のみならず，租界の地価までもが下落していったため[66]，公債の担保としての価値は相対的に高まった。1930年代前半において，公債価格は上海事変の影響で1932年に急落したのを除けば概ね上昇傾向にあり[67]，土地不動産よりも流動性が高かったので，公債は貸付の担保として比較的優良なものとして歓迎された。国民政府が発行した公債の売買は上海を中心に行われた。北京政府期に於いても上海の公債売買は盛んであったが，首都の移転後には，上海証券取引所は公債の発行市場と流通市場を兼ねるようになり，取引量も急増した。1928年に於いて，北京証券取引所の取引額約5億6,800万元に対して，上海証券取引所の取引額は約3億8,000万元で北京証券取引所の取引額のほうが多かったのに対し，1931年には北京証券取引所の取引額は約1億3,600万元まで落ち込み，逆に上海証券取引の取引額は39億元以上にまで増加していた[68]。

これは，政府借款が上海で行われるようになったことに由来し，かつての公債の発行地の北京と，北京で発行された公債が大量に流通していた天津の金融上の地位の低下を伴うものであった。以下は，「大公報」の記事である。

「首都が南遷し，政府における借款の多くに影響が生じたが，天津市金融界にその影響が少なかったのは，多かれ少なかれ伝統的関係があった。しかも，首都の南遷以後，政府借款は多くは上海において行われ，天津金融界のみならず，北京金融界もこれの影響を受けない。これゆえ，去年一年の天津金融界では借款による混乱は非常に少なく，一般金融界はこの影響が及ぶのを避けるばかりである。去年四月より軍事事件が発生し，閻錫山が金融界で資金繰りをしようとしたが，北京と天津ではこれに対して消極的態度を示し，終ぞ成功しなかった。北京と天津の地では，これを好機として利益を得ようとするものは現れなかった。従って，この戦争では，政治借款の面では，北京と天津は，影響は極めて少ないか，もしくは絶無だったと言える。[69]」

「去年四月の軍事事件」とは，国民政府と山西軍閥の閻錫山が衝突した中原大戦のことである。こ

(65) 千家駒『旧中国公債史資料：1894–1949』中華書局，1984年，370～375頁。1927年の国民政府成立以後は，1937年の末までに56種類もの公債が発行され，その発行額も巨額であった。

(66) 上海の土地交易については，趙津『中国城市房地産業史論』南開大学出版社，1994年，33頁。天津の中国人居住地の地価については，詹玉栄，謝経栄『中国土地価格及估価方法研究：民国時期地価研究』北京農業大学出版社，1994年，114頁。天津の租界の地価については，天津市房地産管理局『天津房地産志』天津社会科学院出版社，1999年，527～528，545～547頁。

(67) 中国聯合準備銀行『中国内外債詳編』出版社不明，1940年，236～237頁。

(68) 北京証券取引所の1928年は，「大公報」1929年1月13日～1月15日，1931年は「大公報」1933年1月22日のデータに基づく。上海については，楊蔭溥『中国金融研究』商務印書館，1936年，131頁に基づく。

の記事における天津金融の状況は，首都北京と近接し，政府借款が極めて盛んであった北京政府時代と状況は異なっていた。

このように，1930 年代に入ってからは，公債売買の上海への一極化が進んでいた。これによって，北京，天津に於いて公債売買や，公債を抵当とした貸付を行うことが困難となり，北京や天津の銀行が，1930 年代以降，続々と本店を上海に移動させる一つの要因ともなったと考えられる。1930～1936 年に本店を上海に移転させた銀行は合計で 12 行あったが，そのうち北京が 2 行，漢口が 2 行，天津が 8 行であり，天津が圧倒的に多かった[70]。これは，この時期の上海金融界の拡張と天津金融界の縮小を端的に示している[71]。

金城銀行の経営動向もこうした流れに沿うものであった。以下は，1928 年 11 月 20 日の金城銀行の董事会議事録である。

「［南下視察］周作民総経理の報告：国民党の軍隊が北方に到着して後，南北は統一され，政治の拠点はすでに南方に移った。我が行は，以前良い関係を築いていた機関に対して，現在そして将来に渡って，我が行の業務と関連する事件について，一度南方に赴いて相談し，事情を視察しなければならない。そうすれば，今後有事の際に便宜をはかることが出来るだろう[72]。」

続いて，1930 年 12 月 5 日の董事会議事録である。

「……周作民総経理のもう一つの報告：現在の政治の中心は南方に移っており，重大事件があったときは必ず連絡をとらなければならないので，私が常に南方へ行くことがあることを，特に報告します[73]。」

---

(69)「大公報」1931 年 1 月 1 日。以下は原文である。
「……首都南遷，政府上借款多発生影響，津市金融界感受独少者，不無多少伝統的関係，且自首都南遷以後，政府上借款，多在上海交渉，不但為天津金融界無関，即北平金融界亦不受影響，故去一年中，天津界頗少政治上借款騒乱，一般金融界又均避之惟恐不及，自去年四月起，軍事発生，閻方在金融界筹款之挙，始終未得成功者，平津金融界消極態度，有以致之，蓋両地金融界任何皆不欲乗機取利也，所以此次戦争，関於政治借款方面，平津受影響独少，或者可以認為絶無，……」

(70)「歴年開設銀行年別統計細表」『全国銀行年鑑』1937 年 6 月。

(71)『全国銀行年鑑』1937 年 6 月，D1～G15 頁によれば，1936 年末において，銀行 1 行当たりの平均資産額は，本店が上海のものは 71,519,132 元であり，北京の 7,556,446 元，香港の 7,651,887 元，そして天津の 33,960,469 元を大きく上回っていた。

(72)『金城銀行史料』上海人民出版社，240 頁。以下は原文である。
「｛南下察看｝周総経理報告：自国軍到北方之後，南北統一，政治重心已移到南方。本行対於従前各機関来時宜，以及現在，将来於本行業務有関事件，必須往南方接洽一次，察看情形，随後遇事方能便利。」

(73)『金城銀行史料』240 頁。以下は原文である。
「……周総経理又云：現在政治中心即移南方，遇事重大事件時須接洽，作民常有往南之時，特此報告。」

表 7　金城銀行の支店別貸付額及び貸付額割合

（単位＝元）

行別	1928 年末		1933 年末		1937 年 6 月	
	貸付総額	割合（%）	貸付総額	割合（%）	貸付総額	割合（%）
総計	30,840,394	100.00	62,498,803	100.00	96,156,943	100.00
総経理処	793,000	2.57	5,622,165	9.00	894,296	0.93
天津	8,119,344	26.33	9,515,662	15.23	10,875,799	11.31
北京	9,036,980	29.30	16,916,651	27.07	28,917,335	30.07
上海	8,954,846	29.04	22,858,665	36.57	40,210,698	41.82
漢口	2,595,536	8.42	3,188,330	5.10	6,582,377	6.85
その他	1,340,688	4.35	4,352,330	6.96	8,676,438	9.02

出典：『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，371 頁。

周作民は，首都の南京への移動に際して，従来取引関係を持っていた政治的機関との関係を保つため，上海の視察を行っていた。金城銀行が本店を上海に移動させたのは 1936 年の 1 月 1 日であるが，1930 年の末時点には，もう既に経営の中心を上海に移動させる方針を固めていたことが分かる。そして，その方針には政治機関の上海への移転が大きく影響していたのであり，1920 年代からの営業方針は大きくは変わっていなかった。こうした金城銀行の営業方針は，その後の銀行による貸付市場の再編において如何なる意味を持ったのであろうか。

(2)　銀行の地域性と貸付市場の再編

1920 年代の金城銀行は，大口顧客を重視し，銀号が取引先としていたような中小商工業者への貸付に対しては消極的であったことは，第 1 節で既に述べた。こうした商工業貸付の方針は，1930 年代に於いても基本的には変わっていなかった。1937 年 6 月の金城銀行の工業貸付の内訳は，自身の投資に関連する工場 23 戸に対して 18,501,978 元，自身の投資とは直接関係の無い工場 145 戸に対して 5,652,238 元であり，直接的な投資の有無で 1 戸当たりの平均貸付額は 804,434 元と 38,980 元という大きな格差があった。(74) また，同時期の同行の附属事業及び重点貸付企業 16 戸の内，所在地が上海であるものが 8 戸，天津であるものは 8 戸であり，金城銀行の大口の商工業貸付先はこの 2 都市に集中していた。(75)

しかし，金城銀行は 1930 年代に入ると，上海を重視し，天津の経営から撤退していく姿勢を明確に見せている。表 7 は，金城銀行の支店別貸付額及び貸付額割合である。これを見ると，年々総貸付額に占める天津の割合が下がっており，貸付額の伸び自体も低迷していたことが分かる。金城銀

(74)『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，369 頁。

(75)『金城銀行史料』上海人民出版社，1983 年，287，370，380～381，438 頁。16 戸の内，5 戸は支店を有する企業であり，天津と上海にあったたわけではない。他に北京，漢口，南京，重慶，河南安陽，山東峰県などの所在地があった。

表 8　1933 年の沿海六大都市の工場の分布

地区	工場数	1 工場当たり資本額（元）	1 工場当たり生産額（元）	1 工場当たり労働者数（人）
全国	18,676	25,952	74,246	42
上海	3,485	54,769	208,818	71
天津	1,224	19,791	60,866	28
武漢三鎮	787	26,506	93,139	61
無錫	315	44,667	245,237	202
広州	1,104	11,793	92,002	29
青島	140	126,071	193,571	68
上記六大都市	7,055	39,783	153,290	62

出典：陳眞『中国近代工業史資料 第四輯 上巻』生活・読書・新知三聯書店，1961 年，95 頁。

行は天津に於いて多数の大口顧客と取引関係にあったので，このことは，金城銀行の天津における中小規模の顧客への貸付が相対的に少額であったことを意味する。何故，天津ではこのような貸付の構成であったのであろうか。それは，表 8 に一つの手がかりがあるように思われる。

表 8 は，1933 年の沿海六大都市の工場分布である。これを見ると，まず，天津は工場の数が 1,224 廠と，他地域に比べてかなり多いことが分かる。しかし，天津の 1 工場当たりの資本は 19,791 元であり，全国平均の 25,952 元よりもかなり低く，これより低いのは 11,793 元の広州のみであった。さらに，1 工場当たり生産額も 60,866 元と主要 6 都市で最も低く，全国平均の 74,246 元よりも低かった。1 工場当たりの労働者数も 28 人と主要 6 都市の中で最も低く，全国平均の 42 人を大きく下回っていた。つまり，天津は大工場も建設されていたが，概して小工場が林立している地域であったのである。

このような天津の工業の特徴は，金城銀行の新たな貸付を遠ざける一つの原因となったと考えられる。以下は，1931 年の金城銀行の議事録の一部である。

「（寅）米屋，布屋，面粉屋，小工場等　この種の元々は銀号が扱っていた貸付を，銀行が行うべきか否か？……米屋などに対しては取引を推進し，茶屋など従来から信用及び資本が豊かであるものにも皆，実情を斟酌して貸し付けて良い。小工場に関しては，その資本は不確実で（経営状況の）内容もまた非常に複雑であり，貸付は許容出来ない。……」(76)

この議決からは，金城銀行もこの時期には銀号の貸付の代替化を画策していたことがうかがえる。ここでは米屋や茶屋への貸付は許容するものの，小工場については資本規模の小ささ，経営状況の

(76)『金城銀行档案史料选編』天津人民出版社，2011 年，26 頁。以下は原文である。
「（寅）米荘，布荘，面粉荘，小工場等　此類本是銀号生意，銀行是否可做？……以米荘等類推之，如茶号等能知其向来信用及資本殷実皆可酌做。至小工場，其資本既不確実，内容又多複雑，則不可做。」

把握が困難であることを理由に貸付を避けており，この分野に於ける銀号貸付の代替化は，小工場の林立する天津に於いては特に緩慢なものであったと考えられる。

一方，上海銀行は金城銀行よりも積極的に商工業貸付の顧客を開拓していった。以下の引用文はその一例である。

「銀行においては，担保商品は，安全性が高く，売り捌きやすいものにするのが原則である。この条件は，保管が容易であって価格変動が少なく，かつ市場において広く流通しており，随時売りに出すことが可能であるかどうかで見分ける。食塩は私達の日常の食生活においての必需品であり，銀行融資の最良の対象であると思われるのだが，残念なことに当時塩商人は極めて保守的であり，有力な塩商人も担保借入をしたがらず，資金が入用の時は，自身の信用を以て大商店や銭荘への滞納や掛け金に頼るだけであった。その後，塩商人は徐々に衰退していったが，我が行（上海銀行）はどうにかして塩商人と関係を持とうと注視していた。1928 年，我が行の南京支店の李桐村がなんとか塩商人との商談にこぎつけ，塩業貸付の窓口を開くことに成功し，その後，銀行の多額の運用が行われることとなった。(77)」

塩は 1 単位が小額で，(78) 比較的安全性と流動性が高いため，これを担保とする貸付が推進された。塩商人への貸付は商業貸付として計上されており，上海銀行の経営方針と非常に良く合致するものであった。

表 9 は，1934 年の上海銀行の塩業貸付の詳細である。塩業貸付は 1934 年には全国の 26 地域で実施された。貸付先は華東が中心であったが，華中にもかなりの貸付があり，華北，東北でも貸付が行われていた。(79) 新規貸付先には＊をつけて区別してある。これを見ると，1934 年において貸付が行われた 26 地域のうち，8 地域が新規貸付先であり，各地の貸付の拡充が推し進められていたことが分かる。1934 年は，恐慌の影響が深刻な時期であったが，上海銀行は塩業貸付において，収益性があると見れば積極的に貸付を広めていたと言うことが出来る。

しかし，とりわけ目を引くのは，天津に対する新規貸付が行われていることである。しかも，天津への貸付は 1,594,403.40 元で，新規貸付先への貸付額の 7 割以上を占めていた。もちろん，上海銀行の貸付はあくまで華東が中心であったことから，上海銀行天津支店の貸付額が，金城銀行天津

---

(77)『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，564～565 頁。以下は原文である。
「銀行受質商品，欲求合於安全与活動之原則，其条件在於鑑別，易於保管而価少変動，並有広大市場随時可以脱售。若食塩為吾人日常食用必需，実為銀行放款最好之対象，惜其時塩商墨守成規，号称富有，不肯以之向人押借，即有時需款，亦凭信用在行荘欠款而已。其後塩商日漸衰落，本行即注意如何与之発生関係。民国 17 年，本行南京分行李桐村先生設法与準商逐歩接洽，遂開塩業貸款之門径，其後成為同業之大量運用。」

(78)『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，570～571 頁。

(79)『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，567～569 頁。

表 9　1934 年上海銀行塩業貸付総額と回収額との差額，及び年末貸付残高

（単位＝元）

場所	総貸付額	回収額	貸付金–貸付回収額	年末貸付残高
全国 18 都市	35,794,319.60	34,878,072.28	916,247.32	10,332,451.89
＊清江浦	434,325.30	406,862.80	27,462.50	27,462.50
＊安慶	111,970.00	90,020.00	21,950.00	21,950.00
＊臨川	46,400.00	46,000.00	400.00	400.00
＊東台	33,893.92	19,372.16	14,521.76	14,521.76
＊院前	20,000.00	6,000.00	14,000.00	14,000.00
＊臨淮	4,846.00	4,846.00	0.00	0.00
＊天津	1,594,403.40	1,249,701.91	344,701.49	344,701.49
＊漯河	14,000.00	14,000.00	0.00	0.00
全行合計	38,053,618.22	36,714,875.15	1,338,743.07	10,755,487.64

出典：中国人民銀行上海市分行金融研究所編『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，567～569 頁より作成。最上欄の全国 18 都市は，1933 年以前からの貸付であり，天津を含むそれ以下の都市の欄では，貸付額と回収額の差額と年末貸付残高が一致しており，これらは 1934 年の新規貸付である。

支店の貸付額を超えていたなどということは有り得ない。しかし，こうした上海銀行の貸付は，天津本店の比重を低下させていた金城銀行とは対照的であり，天津に於ける両行の勢力を相対化する結果とはなっていた。

両行の貸付における差異について，上海銀行の貸付方針との関係をもう少し詳細に見てみよう。以下は，1931 年 10 月の議事録の引用である。

「今後の営業方針は以下のように規定する……（二）以前は少数の顧客に大量の資金を貸し付けていたが，今後に於いては，多数の顧客に少数の資金を貸し付ける方向に移行する。そうすることで，より広い範囲で業務を展開しつつ，リスクは分散されることによって小さくなり，貸付の総額も逆に少なくなるだろう。[(80)]」

この分散貸付による信用リスク管理は，創業時から商工業貸付の開拓を進めていく中で成長していった，上海銀行ならではのものであると言えよう。この貸付方針は支店の拡大の中で実現されたため，表 10 に見られるように，この時期には上海銀行の全貸付に占める支店の貸付の割合は上昇していた。

天津に於ける金城銀行と上海銀行の貸付の動向の対照性も，大口顧客へのモニタリング強化を重視するのか，それとも分散貸付によってリスクを分散していくのかという，信用リスク管理上の方

（80）『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，334 頁。以下は原文である。
「規定今後営業方針之原則及方法如後……（二）以前供給少数顧客以多量之資金，今後宜収移之，供給多数顧客以少数之資金，俾服務可較為普広，而風険因分散而較少，放款之総和可反較少。」

表 10　恐慌期における上海銀行の貸付総額の本支店割合

（単位＝%）

区域	1931 年	1932 年	1933 年
上海本店	61.37	56.14	48.26
各港支店	38.63	43.86	51.74
合計	100.00	100.00	100.00

出典：『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社，1990 年，627 頁。

針の違いと理解することが出来るであろう。そして，この相違は 1920 年代からの両銀行の経営方針の違いに由来していると考えられる。上海銀行は，銭荘が貸付対象としていた中小商工業者へも貸付を行っており，積極的に新たな商工業貸付先を獲得しようとする経営方針であった。このため，恐慌によって商工業が停滞する中で，貸付の基準を厳格化しつつも，新たに生じた融資の需要の中から収益性の高いものを見極め，貸付の範囲を拡大することが出来ていた。この過程で銭荘の貸付の代替が大きく進められた。

金城銀行は 1920 年代の商工業貸付に於いて軍閥，官僚，周作民の友人といった人脈を頼りに，大商工業者への貸付を重視し，銀号が貸付の対象としていた中小商工業者への貸付に対しては消極的であった。大商工業者を重視する方針は 1930 年代に入っても大きくは変わらず，金城銀行はこの時期に銀号の貸付の代替化を進めるものの，上海銀行ほど積極的に推進されてはいなかった。その結果，天津に於いて顕著に見られたように，貸付市場の再編過程において，金城銀行の貸付は上海銀行ほどの積極的効果を持たなかった。つまり，1920 年代からの地域的特徴を反映した銀行の経営方針の相違によって，貸付市場の再編に与えた影響に差異が生じていたと考えられるのである。

おわりに

本稿の要点をまとめよう。第一に，1920 年代の銀号と銀行の貸付は信用貸付重視，抵当・担保貸付重視という方針の違いはあったものの，実際上の信用リスク管理は，どちらも企業の実質というよりも人格や名声，肩書きなどの人的な基準を重視したものであって，精度に於いてそれほどの差は無かった。1920 年代の後半には，銀号，銀行の信用リスク管理の方法と，貸付先の商工業の発達の程度に齟齬が生じていた。

第二に，1930 年代の恐慌期には，商工業者の増加と恐慌の本格化によって，対人信用に基づく貸付業務のリスクが全国規模で表面化し，銀号が商工業貸付で強みを発揮するための土台が崩れていた。信用リスクの高まりを受けて銀号は極度に貸付を収縮したため，銀行の直接貸付によって貸付市場の秩序が再編される必要が生じていた。また，この時期には紡績企業等の業績悪化が深刻化しており，銀行はこれらの顧客に巨額の追い貸しをすると同時に，経営再建に乗り出していた。銭荘

は，このような巨額の貸付に対応出来なかったが，銀行はこの過程で信用リスク管理を改善させていくこととなった。

第三に，銀行が貸付市場の秩序の再編に果たした役割は，銀行の地域的特徴を反映した経営方針によって差があった。1920 年代の天津は，首都北京に最も近い開港地であったため政治的影響を強く受け，商工業貸付については，軍閥や官僚などが経営，出資する大商店や大工場への貸付の比重は非常に高く，銀号が貸付の対象としていた中小商工業者への貸付に対しては消極的であった。一方，上海は貿易，産業などの中国経済の中心であり，上海商業儲蓄銀行の経営も商工業貸付を中心に据えており，銭荘が貸付の対象としていた中小商工業者への貸付に対しても積極的であった。両行のこのような経営方針は，1930 年代に入っても大きくは変わらず，貸付市場の再編に於いても金城銀行は大口貸付を重視する傾向が見られ，支店を積極的に拡大して少額の貸付を増加させた上海銀行よりも，貸付市場の再編に与えた影響は少なかった。

岡崎清宜，李一翔らの銀号と銀行の関係に関する実証研究を含め，多くの先行研究では，銀行の躍進が顕著となった 1930 年代を画期とし，この時期の銀行を高く評価している。本論文はこうした先行研究を踏まえて，個別銀行の経営展開にまで分析を深め，1930 年代に於ける銀行の直接貸付による貸付市場の再編は，銀行と地域によって一様では無かったことを実証した。1930 年代は銀行貸付の画期ではあったが，銀行による銀号の貸付の代替化は，銀行の創設期からの地域的特徴を反映した経営方針によって規定されていたのであり，1920 年代からの貸付方針との連続性もまた，非常に重要な要素であったと言うことが出来るであろう。

（経済学研究科後期博士課程）